幼児が 賢くなる絵本

すくすくどんどんの 教育デザイン研究所

幼児が賢くなる絵本

絵本は幼児を賢くする

絵本の楽しみ方

絵本の選び方

お薦め絵本

6カ月ぐらいから

1歳ぐらいから

2歳ぐらいから

3歳ぐらいから

4歳ぐらいから

5歳ぐらいから

絵本は幼児を賢くする

絵本は、幼児の成長を促す大きな力を持っています。絵本は幼児 に 、絵本独自の新しい世界を提供してくれます。

その世界の中で幼児は、自分の内面に豊かなことばと創造力を育んでいけるのです。

1幼児の言語能力を発達させる

まず、絵本によって、幼児の言語能力を発達させることができます。親から 絵本を繰り返し読み聞かせてもらううちに、幼児は新しいことばを覚えてい きます。耳からことばを聞いて、目で絵を確認することで、身の回りにあるも のだけでなく、より広い範囲のことばを獲得することができます。また子ども は、絵本の中のリズム感あふれることばが大好きで、まねをして遊びながら、 新しいことばを覚えるということもあります。絵本を1つの材料にして、そこ から親子の語り合いが始まることもあります。絵本による言語活動が、こう したさまざまな面で幼児の言語能力の発達を促します。

2 抽象的なことばから具体的にイメージする想像力をのばす

幼児が絵本を理解する時には、読んでもらって耳から入っていくることば、あるいは自分で読んだことばを、頭の中で具体的なものに対応させるという主体的な活動を行っています。絵本には絵がありますが、ストーリー全体が絵で表現されているわけではありません。ことばという抽象的なものから自分で想像してイメージを作り上げていくことが必要になります。このように絵本によって、幼児の想像力や抽象的な概念を理解する能力をのばすこともできます。

3. 幼児の体験を広げ、判断力を培う

さらに絵本は、幼児が体験する世界を広げ、いろいろな価値判断の基準となる情報を幼児に与えることもできます。絵本の中では、幼児が体験したことのないさまざまなできごとがくりひろげられます。絵本の世界の中で幼児は、それらに 喜んだり、驚いたり、悲しんだり、怒ったりという新しい体験を拡大していくのです。そして自分なりに判断する力を培ってゆきます。

絵本は、このように幼児のいろいろな能力を発達させる大きな力を持っています。 けれども、ここで注意すべきことがあります。このような能力を身につけさせることが、幼児に絵本を与える目的になってしまってはいけないということです。「ことばを覚えるために」ということで絵本を読んであげても、幼児は楽しくないのです。楽しくなければ、絵本ぎらいになってしまいかねません。

絵本は、楽しむためのものです。親子で一緒になって、絵本のすばらしさを存分に味わっていただきたいと思います。絵本を読み聞かせる、幼児が自分で絵本を見る・読むということを十分楽しむことによって、その結果、幼児のいろいろな能力が発達してゆくのです。絵本によって能力を発達させることは、絵本を通じての言語活動の結果であって、目的ではありません。これは、絵本だけでなく読書全般について言えることです。幼児期は、幼児が初めて本とのかかわりを持つ大切な時期です。この時期に本(絵本)が好きになった幼児は、その後も自分で読書をすすめていくことができるでしょう。

幼児たちに、絵本とのすてきな出会いの場を作ってあげ てください。

お薦め絵本

すばらしい絵本というものは、年齢を問わず楽しむことができるものです。とはいえ、その時期の幼児の能力の発達にあった理解しやすい絵本というのは、やはりあるものです。幼児に絵本の楽しさを無理なく感じとらせるには、幼児の発達にあった絵本を、ある程度段階的に与えていくのがよいでしょう。

以下に、発達段階ごとにどんな絵本がよいかということをご説明し、適当な絵本の一例をリストアップしておきます。

<6ヶ月~>

生まれて6ヶ月ぐらいの頃から、幼児は自分の身の回りに あるものに非常に興味を持ち、ものの名前をはじめとするい ろいろなことばを、めまぐるしいスピードで習得していきます。 絵本の中のものにも興味を持ち始めます。

この時期には、まず、身の回りの品物や食べ物・動物などをわかりやすい絵や写真で表現した絵本がよいでしょう。絵本を見ながら、名前を教えてあげたり、どんな時に使うかなどを簡単に説明してあげて下さい。絵本を見ながら、親が繰り返し語りかけてあげると、幼児が自分でことばを発しながら絵本を楽しむようになってきます。生活の中で実際のものからことばを学習するのと並行して、絵本を通じた語りかけで、幼児のことばの世界をより豊かなものにしてあげて下さい。

<1才~2才>

1才をすぎる頃になると、ページをめくると次の場面になるような、簡単な場面展開のある絵本もよいでしょう。この頃には、連続したできごとを理解し、次に何が起こる外でもごとを理解し、次に何が起こる場合といるものなどがようになります。 り返しのあるものなどがよいでしょう。幼児は、絵本のページをめくりながらお話の中で覚えたことばを言って、自分で絵本を楽しむようになります。

- ●簡単な場面展開がある
- ●身近なできごとや遊びがテーマ
- ●ことばがリズミカル、繰り返しがある



「いない いない ばあ」

松谷みよこ・作 瀬川康夫・絵 (童心社)

ーーわが家の長男は1才すぎの頃、この「いない いない ばあ」の絵本で遊ぶのが大好きでした。ねこ、くま、ねずみ、きつねが次々に「いない いない」といいながら出てきては、次のページで「ばあ」とやってくれるのが、うれしくてたまらない様子でした。ちょうど自分でも「いなーい ばあ」と片言で言えるようになってきていたので、私が読んでやるのと一緒に自分も声を出して遊んでいたようです。

絵本の本文では、「にゃあにゃ」とか「こんこんぎつね」とかいったことばが使われていますが、私は赤ちゃんことばはかえってわかりにくいと思ったので、「ねこさん」「きつねさん」と言い替えて読んでいました。

最後の「のんちゃん」のところをすぎると、「こんどは、〇〇くんが・・」とか「おかあさんが・・」 「いない いない ばあ」と言って、顔をかくして遊びました。 この段階の絵本はそれを使って遊ぶことが目的ですから、 絵本で遊ぶ側が自分に都合がよいように適当にアレンジして楽しんでもよいのではないかと思います。



あかちゃんとあそぶ絵本〈全4冊〉

1973/12/15 角田 巌 (著) 角田 昭子 (イラスト)

折ってあるページをひらくと、アッと驚く愉快なしかけがあります。この絵本を使ってあかちゃんと肌のふれあいをし、対話をし、語りかけるためのあそびのいろいろを絵の下に図示しています。子どもの教育文化研究家と画家の夫妻が愛情こめて作りあげた絵本です。(アマゾンより)

4分冊のどの本も、ページを半分ずつめくるような仕掛けになっていて、子どもは本を読んでもらえる楽しみと、自分でページをめくって話を展開していく楽しみがあります。

2歳児ぐらいから

2才頃からは、幼児の想像力もかなり発達します。 日常生活では、ままごと遊びや乗り物ごっこなど の「ごっこ遊び」が楽しめるようになってきます。絵 本も、そろそろ物語性のあるものが理解できるよう になります。

最初は、幼児がお話の展開をある程度予測できるように、ストーリーに繰り返しのあるものがよいでしょう。

テーマは、やはり生活の中の身近なできごとのものが、幼児が具体的なイメージを持って理解しやすいでしょう。

また、幼児は動物や乗り物が大好きですから、それらが出てくるお話も興味を持って楽しみます。

幼児の理解しやすい題材を、わかりやすい語り方で伝えてあげることが、幼児にお話の楽しさを味わわせるコツです。

いっぱい たべよう



作:あまん きみこ

絵:上野紀子

(ポプラ社)

好き嫌いするこどもに「〇〇食べたら、大きくなれるよ」って、よく言いますよね。ほうれん草を食べるとポパイのように強くなるとか。私は母親に「ねぎを食べたら賢くなる」と勧められました。それを証明するに至っておりませんが、、、。

この絵本は、主人公のあっくんが動物たちに向かって、「にんじん たべたら はやく はしれる うまさんよりも はやくはしれる」というようにお話をしながら、もぐもぐむしゃむしゃ食べる絵本です。「ねずみくん」シリーズでおなじみの上野紀子さんのかわいい絵です。 ことばのくりかえしやページをめくった後の場面もとても楽しいです。

最後のあっくんの鼻高々の得意そうな顔を見ていると、 やっぱり幼児はほめてあげることが一番かなという気がします。特に、食べることについては、いくらガミガミ怒っても 幼児は食べてくれません。おとなでも食事の雰囲気が楽 しくなければ食が進まないのは自明のことです。

この絵本は楽しんで食べる秘訣を教えてくれます。このごろ、幼児教育の3大サブジェクト(知育、徳育、体育)に「食育」をプラスする幼稚園が増えてきています。

3歳児ぐらいから

たろうのおでかけ



村山 桂子

堀内誠一:絵

(福音館書店)

たろうが動物たちを連れて、仲良しのまみちゃんの家にでかけてゆくお話です。たろうたちはいろいろな所を通ってゆくたびに、「だめ だめ だめ」とまわりの大人から注意されます。みんなはそのたびに「つまらない」と思うのですが、注意を守って歩いていきます。

たろうについてゆく動物たちは、いぬのちろー・ねこのみーや・あひるのがあこ・にわとりのこっこ。 こどもは親しみやすい動物たちの名前をすぐに覚えてしまいます。

この絵本には、幼児が自分で散歩に出かける楽しさがあるれています。絵本を見ている幼児たちは、自分がたろうになったような気分で、いろいろな場所を通り、ちょっぴりあぶない目に会ってどきどきしながら、交通ルールを理解していくことでしょう。

おまたせクッキー



パット ハッチンス 乾 侑美子:訳 (偕成社)

おいしいものを食べる時は、みんなで食べるとよけいに楽しくておいしいものですね。これは、おかあさんが焼いたクッキーを幼児たちが二人で食べようとしているところに、玄関のベルが鳴り、友だちが次々とやってくる・・・というお話です。

12個のクッキーを二人で分けると6個ずつだったのが、人数がどんどんふえ て、みんな1個ずつになった時、次に「ピンポーン」とやってきたのは、たくさんのクッキーをかかえてきたおばあちゃんでした!

カラフルな色使いの絵で、ハラハラドキドキしている**幼児**たちの表情がうまく描かれているおもしろい絵本です。 楽しい繰り返しのお話の中で、**幼児**たちが数を数えたり、 人数で分けるということにも興味が持てるといいですね。

(幼児期のかずの学習は、おやつやくだものなど、**幼児**の好きなものを実際の生活場面で数えることが一番です)

「幼児が賢くなる絵本」

発行 2017年10月26日 著作 教育デザイン研究所 編集 松本 敏史(茶屋萬衛門) 大阪府南河内郡千早赤阪村小吹68-115

※編著者に無断で複写、転載することを禁じます。